



JAPANESE A1 – HIGHER LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A1 – NIVEAU SUPÉRIEUR – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A1 – NIVEL SUPERIOR – PRUEBA 1

Thursday 16 November 2000 (afternoon)
Jeudi 16 novembre 2000 (après-midi)
Jueves 16 de noviembre del 2000 (tarde)

4 hours / 4 heures / 4 horas

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Section A: Write a commentary on one passage.
- Section B: Answer one essay question. Refer mainly to works studied in Part 3 (Groups of Works); references to other works are permissible but must not form the main body of your answer.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- Ne pas ouvrir cette épreuve avant d'y être autorisé.
- Section A : Écrire un commentaire sur un passage.
- Section B : Traiter un sujet de composition. Se référer principalement aux œuvres étudiées dans la troisième partie (Groupes d'œuvres) ; les références à d'autres œuvres sont permises mais ne doivent pas constituer l'essentiel de la réponse.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Sección A: Escriba un comentario sobre uno de los fragmentos.
- Sección B: Elija un tema de redacción. Su respuesta debe centrarse principalmente en las obras estudiadas para la Parte 3 (Grupos de obras); se permiten referencias a otras obras siempre que no formen la parte principal de la respuesta.

第一部

次の I (a) の文章と I (b) の詩のうち、どちらか一つを選んで解説しなさい。
(コメントリーを書きなさい)

I (a)

かんがえるために、すでに頭の中にあつて心をなやます、めまぐるしいことばの流れを追いはらう。自分の呼吸に注意をむけ、その周期をすこしずつゆるめる。自分が〈一個の呼吸器〉(フュニヤン)になるまでこれをつづける。

5 あるいは、指関節をかむ。タバコをふかす、口琴をならすなど、口もとにかたい物質が接触することに注意をはらう。

あるいは、ギリシヤの男がやるようにシユズ玉を繰るとか、アフリカの少年のように親指ピアノをひき、手のくりかえしの運動をたのしむ。

どの場合も、対象物よりも自分の感覚器の先端に焦点をあわすことと、音がしないか、かすかな音をたてるものにかぎることがだいじだ。

10 〈無心〉になつたり、自己催眠で意識をねむりにませるためにこれらのことをやるわけではない。反対に、とりとめない空転のなかに見うしなつていた意識が目をさますのだ。

室内には、めだたぬ変化がきざす。目のまえの物たちや壁がわずかに後退し、いわば真空にあいた穴にはまりこんでうごかなくなる。それらの表面は、内部の質量をまもつて視線をかたくはねつける。

15 まわりのかすかな物音が急に大きくなる。おたがいに無関係なさまざまの音が、それぞれのリズムをもつて、ひとつのポリフォニーにくみこまれる。耳の風景がひらけた。

皮膚はもう自意識をつつみこんで世界に対立するかたいクルミのカラではない。それはうすい皮膚になつてのび、ひろがり、関節をしめつけている筋肉の束はゆるんで、体液のゆるやかな波動は、外部から吹きつけるかすかな風のように感じられる。いまや意識は頭蓋骨のしつかり編まれたかごからすべりおちて、風を通すためにつるした一枚のなめし皮のように、体の内外からのわずかな振動に共鳴してゆれている。局部的で、体のその他の部分に対して抽象であり、まるで体から自立して空間にただよっているような、そのくせしつかり自意識の重みがつき、個人的な所有の印をおされたかんがえは解体され、全身に散つて行く。

20 25 30 どこからともなく、ひとつのちがうかんがえのはじまりがあらわれる。というより、つみあげたガラクタをどけた後の、からつぽな空間にさしこむ光のように、気がつくど、それはそこにあつただ。内部感覚や、まわりのさまざまなひびき、それぞれの場所に静止しながらも、視線のわずかな運動に応じてコマドリ写真のように不連続変化をつづける物たちの風景などとあらそわず、それらの一部として、ただしごとくともなく、いつともなく、だれのものともしれず、ひっそりとそれはそこにある。そのかんがえのはじまりは、視線の移動とともに、目にうつる対象の表面をなめらかに移動し、耳にするどんな音にもその持続低音となつて共鳴しているように感じられる。水におとした一滴のインクのように、それは体全体にひろがつてしまえばかりか、視界全

体もうつすらと色がかかる。

35 これがかんがえのはじまりだ。それは全身的な振動であり、まったく無人称であるために、その起源を内部とするか外部とするかは意味をなさない質問に見える。このかんがえのはじまりを所有することはできない〈自分のもの〉として所有代名詞があたえられると、自意識の目ざめはたちまちこのかすかな振動をとめてしまうだろう。

40 体とそれをとりまく環境との共振から生まれたと言ってもよい、この振動は、それでも〈今ここに〉あり、どことも位置をさだめられず、いつとも起源をきめられないとしても、やはりそのままでは偶然に起こったものにすぎず、一瞬の放心もそれを見うしなわせるには充分だ。ほつておけば消えかかる炎をかきだて、そのひびきを増幅しなければならない。

45 瞬間的に全身をひたすかんがえのはじまりを増幅するためにつかわれる一番かんたんな方法は、立ちあがり、一定の歩調で室内をいつたりきたりすることだ。マヤコフスキーがやったように石だたみの道を手を振りながら歩くのもよいだろう。また三池の労働者に学んで、やつと倒れぬ位のおそいスピードで自転車にのったり、バスや電車の中で立っているのも有効だ。一般に公共の空間は、よい影響をもつ。広く、変化にとんだ空間で、人々にまぎって無名の状態にとどまっていること、歩いたり、振動する乗り物の中で立っているように、ある程度の自発的な運動や反応の姿勢をとることが、かんがえの自然な成長をうながす。タクシーのように、カネをはらってせまい空間を占有し、やわらかいクッションをとおして伝わってくるにふい振動に身をまかせることから生まれるのは、有害な妄想ばかりだ。

(高橋悠治「かんがえのはじまり」)

(注) 高橋 悠治 (一九三八〜) 作曲家。ピアニスト。
出典『ただかう音楽』

- デュシャン Marcel Duchamp (一八八七〜一九六八) フランス生れ。ダダイズムの画家。
- ポリフォニー (Polyphony) 複数の音部がからみあっていく様式の音楽。多声音楽。
- コマドリ コマ撮り。コマずつ撮影すること。
- マヤコフスキー Vladimir Mayakovski (一八九三〜一九三〇) ロシアの未来派の詩人。
- 三池 福岡県の炭田。一九五九年の労働争議では、自転車によるデモ行進が行われた。

1 (b)

雪崩ゆきなげのとき

人は
その時がきたのだ、という

雪崩のおこるのは
雪崩の季節がきたため、と。

5 武装を捨てた頃の
あの永世の誓いや心の平静
世界の国々の権力や争いをそとにした
つましい民族の冬ごもりは
10 いろいろな不自由があっても
また良いものであった。

平和
永遠の平和
平和一色の銀世界
15 そうだ、平和という言葉が
この狭くなった日本の国土に
粉雪のように舞い
どっさり降り積もっていた。

私は破れた靴下を繕い
20 編物などしながら時々手を休め
外を眺めたものだ。
そして ほっ、とする
ここにはもう爆弾の炸裂も火の色もない
世界に覇を競う国に住むより
25 このほうが私の生き方に合っている
と考えたりした。

それも過ぎてみれば東の間で
まだととのえた焚木もきれぬまに
人はさわめき出し
その時が来た、という
30 季節にはさからえないのだ、と。

雪はとうに降りやんでしまった、

降り積もった雪の下には
もうちいさく 野心や、いつわりや
欲望の芽がかくされていて
35 “すべてがそうになってきたのだから
仕方がない、”というひとつの言葉が
速い積のあたりでころげ出すと
もう他の雪をさそって
しかたがない、しかたがない
40 しかたがない
と、落ちてくる。

ああ あの雪崩
あの言葉の
だんだん勢いづき
45 次第に広がってくるのが
それが近付いてくるのが

私にはきこえる
私にはきこえる。

(一九五二年 石垣 りん)

第二部

授業で学習した部門(Part 3)から、(a)(b)の問題のうち一つを選んで、エッセイを書きなさい。エッセイを書くにあたっては、必ずPart 3で学習した文学作品三つのうち二つに言及すること。なお、この二作品のほか、他の作品について述べてもよい。

2. 美の探求

- (a) 俊成や定家などが和歌の美的理念の一つとして考えていた「幽玄^{ゆうげん}」が、あなたの読んだ作品の中にも見られますか。例をあげて「幽玄」の美について、あなたの考えるところを述べなさい。「幽玄」を見いだすことができない場合は、美に関する考え方について述べなさい。（「幽玄」とは、言外にこもる情趣・余情の意）

あるいは

- (b) あなたの読んだ作品の中で、作者が「美」を表現する場合の共通点あるいは相違点について、考えるところを述べなさい。

3. 社会と個人

- (a) あなたの読んだ作品の中で、社会からの拘束と、それに対する個人の精神の自由について、考えるところを述べなさい。

あるいは

- (b) 社会における個人としての意識（アイデンティ）について、あなたの読んだ作品から例をあげて、考えるところを述べなさい。

4. 自然と人生

- (a) あなたの読んだ作品において、作者は自然と人間との関わりをどのようにとらえていますか。例をあげて、共通する点あるいは相違する点について、考えるところを述べなさい。

あるいは

- (b) あなたの読んだ作品において、自然は作品の中でどのように描かれていますか。いくつかの例をあげ、それがどんな効果を生じているかについて、あなたの考えるところを述べなさい。

5. 家族

- (a) 社会のすべての問題の根源は家庭にあるという意見があります。これについて例をあげ、あなたの考えるところを述べなさい。

あるいは

- (b) 家庭の中で成員同士が衝突を回避する方法は、その家庭が属する社会によって大きく異なっていると言われています。読んだ作品から例をあげて、あなたの考えるところを述べなさい。

6. 愛と友情

- (a) 「男女間の葛藤は文学の永遠のテーマである。なぜなら、それによって、人間の生の根源的なものがむき出しになるからである。」という意見があります。あなたの読んだ作品にそのようなことが言えますか。具体的に例をあげて、考えるところを述べなさい。

あるいは

- (b) 恋愛や友情を描いている作品には、当時の社会のあり方が深く反映すると言われます。例をあげてあなたの考えるところを述べなさい。